平成２７年度　富里歴史講座　　於：富里市立図書館

2016・3・13

林田利之

第３回「岩﨑彌之助伝」

～彌太郎の志を受け継ぎ、三菱の大転換を図った二代目～

１．彌之助誕生

岩﨑彌之助（**図１**）は、嘉永４年１月８日（1851年２月８日）、土佐の井ノ口村（現在の高知県安芸市井ノ口）の地下浪人岩﨑彌次郎・美和夫妻（**図２・３**）の次男に生まれ、彌太郎とは16歳違いでした。

生家（**図４**）は、寛政７年（1795）頃に彌太郎の曾祖父、彌次右衛門が上一之宮から移築したもので、茅葺き寄棟造りの平屋でした。屋敷内面積は約1200坪を測り、式台のついた玄関を入ると、奥に九畳の居間と八畳の表座敷、裏手に控えの間があります。

図１　岩﨑彌之助

図２　父・岩﨑彌次郎

図３　母・岩﨑美和

彌之助出生の２年後、嘉永６年（1853）にはペリーが浦賀に来航して開国を迫るなど、当時の日本は社会の変革の予兆に浮足立っていました。この頃、土佐藩では藩主山内豊重（容堂）が吉田東洋を起用し、行き詰った藩政を改革しようとしていました。

２．幼少期

彌之助は、彌太郎との対比で語られることが多いのですが、実は長姉・琴、兄・彌太郎、次姉・佐幾との４人兄妹の末っ子として生まれました。母・美和の手記によると、彌太郎は以前から男兄弟がいないことを寂しがっており、生まれてきた彌之助を格別に可愛がったといいます。

図４　現在の生家

彌之助は生後間もなく大病を患い、父母が覚悟を決めた中、彌太郎だけは「何としても彌之助を助ける」と言って懸命に看病し、彌之助は一命を取り留めたのでした。後にこの出来事が彌太郎と彌之助の強い絆へと結びついていったものと考えられます。

兄・彌太郎の時もそうであったように、岩﨑家の生活は決して楽なものではありませんでした。彌之助の幼少期には父が庄屋とのトラブルから大怪我をし、それを聞きつけた兄・彌太郎が江戸遊学から急きょ戻ったものの、奉行所に悪態をついて投獄されるなど、岩﨑家は悲惨の極みでした。

後年、彌之助は当時を回想して、「母が私を背負い、川のほとりの田地に行き耕しておられたのを覚えている。母は急に目まいがしたか、よろよろと倒れかかりしばらくは地面に座っておられた。子供ながらにその時の母の苦労は大変なものであると思った」と述べています。

３．修学時代（大阪・米国）

※大阪時代

明治２年（1869）18歳になった彌之助は、土佐藩開誠館の長崎から大阪に移っていた彌太郎を頼って、土佐から大阪へと行きました。土佐藩邸に多くの若者たちとともに住み、ここから重野安繹（しげの　やすつぐ）（**図５**）の私塾、成達書院に通いました。重野は昌平校で学んだ漢学者であり、鹿児島の造士館の助教から大阪に出て私塾を開き、維新後は文部省修史局、東京帝国大学教授として国史学の研究に当たった人物でした。

図５　重野安繹

後年、重野の述懐によると、「彌之助が私の塾に来たのは明治２年であった。塾生は一時百余名もいた。彌之助は兄と西長堀の土佐屋敷に住まい、毎日怠らず通学していた。他の塾生との付き合いなども良くしており、別段他生と異なる奇抜なことはなかった。品行はこの時代から方正であって、決して人から非難されるようなことはなかった。兄弟の性格は余程違い、兄は洒落とした、また豪胆な肌合であるが、弟はごく順良な忠実な性質で最も兄に仕えていた。」と述べており、三菱の社長となった彌太郎を影となって支えた彌之助の姿勢が既に伺えます。

彌太郎の活躍の場は大阪や東京で、しかも多忙を極め家族のいる安芸へはそう容易には帰れませんでした。明治４年、父は配架、家族はひとまず高知へ引っ越し、彌之助の留学中でしたが、明治６年には大阪にあった武家屋敷を買い取って岩﨑家一同は移り住むこととなります。

※米国時代

土佐藩では彌太郎の威光で米国人を招いて若者たちに英語を勉強させていました。彌之助も英語を学び外国事情を勉強しています。

明治５年（1872）４月、彌之助は彌太郎の指示で米国に留学（**図６**）することになります。

図６　留学時代の彌之助

前年、岩倉具視、木戸孝允らの遣米欧使節が出発するのを見た彌太郎が「これからは世界が相手だ。お前も行け」と言い、留学先を決めてあとを追わせたのでした。

彌之助は横浜からサンフランシスコに渡り、出来て間もない大陸横断鉄道でニューヨークへと向かいました。これには長崎で彌太郎の取引相手であったウォルシュ＆ホール商会が渡航手続き・学費の送金などの世話をしたそうです。彌之助はニューヨークに着き、コネチカット州のエリントンという村の小さ